

## 培った知見を地域に還元する 医師人生の集大成となるクリニック

専門の呼吸器内科でも質の高い治療を提供



地域への啓蒙など、少しでも肺病を予防する大切さを  
伝えていければと思います

医療法人好日会  
こばやし内科・呼吸器内科クリニック  
院長 小林 裕康

2022年4月に開院したこばやし内科・呼吸器内科クリニック。呼吸器内科の専門医として約30年の経験を持つベテラン医師、小林裕康院長が陣頭指揮を執っている。〝かかりつけ医〟として地域医療を支えるかたわら、専門の呼吸器内科の診療も行っている。

若い頃、医療過疎地の診療所に3年間勤めた経験が医師としての原点になっている。医師の数が少ない地域では患者の要望に応えて、内科だけではなく外科の治療も行うなどオールラウンドの対処が求められる。悪戦苦闘の毎日だったが、当時30歳手前と無理が利く体力のある年齢であり、「大変だったが医師の礎を築いてもらった経験だ」と考えている。

勤務医として豊富な経験を積んできた小林院長は60歳を間近に控えたタイミングで、医師人生の集大成として開業医への転身を決意。「自分を育ててくれた地域に恩返ししたい」という想いが後押しした。

### 高校生の時に見た過疎地で活躍する若き医師の姿に感銘を受ける 過疎地の診療所で地域医療の魅力に目覚める

小林院長が医師を目指したきっかけは、高校生の頃にたまたま見たテレビのドキュメント番組。自治医科大学の1期生が、無医村だった鳥羽の神島へ1人で赴任するという内容だった。

小林院長は島でたった1人だけの若い医師が、「島民の命は自分が守る」という強い意思のもと医療過疎地で奮闘する様を目の当たりにし、その真摯な気持ちに感銘を受けた。

その番組との出会いは、「自分も地域を守る医師になりたい」と決意する大きな動機となる。小林院長は



## 医師の集大成、恩返しへの気持ちに胸に開業医へ転身 呼吸器内科の診療を求める患者も徐々に増加

3年間の診療所勤めの後は、三重大学医学部付属病院に転籍する。1999年には米国・ニューヨーク・コーネル大学医学部の研究員として、呼吸器の遺伝子治療に携わり、同じく留学していた多くの日本人医師と知己を得た。

「呼吸困難で苦しむ患者の要請で、嵐の中、事務長と2人で酸素ボンベを担いで届けたこともありましたが、『専門ではないから』と診ない訳にはいかなかった。自分が地域医療を守る最後の砦として戦わなくてはなりませんでした」

苦労も多かったと振り返るが、今となっては「あの3年間の経験は自身の血肉になっています。懐かしく思い出されます」と小林院長。広い範囲で患者を診察できるプライマリケアを実践する総合内科専門医としての経験を積むことが出来たと考えている。

小林院長は「自分の中に流れている血の半分は地域医療だ」と感じているという。出身校の自治医科大学の銘で、同クリニックのウェブサイトにも掲載されている「医療の谷間に火を灯す」という言葉は、まさしく小林院長が実践してきた地域に貢献する医療そのものである。



「医療の谷間に火を灯す」という言葉を胸に地域医療に従事するスタッフたち

当時、小林院長は30代手前。1番体力のある年齢だったこともあり、診療を終えた後の夜も往診に出掛け

番組で紹介された若い医師の出身校である自治医科大学を目指すことに決め、努力の甲斐あって同大学へと進学することが出来た。

卒業後は県立病院で初期研修医として、内科をはじめ多科をローテートする研修を受けた後、1989年には三重県南端の医療過疎地にある紀南病院へ配属された。その2年後には、さらに山の中へ入った紀和町立紀和診療所に異動することになる。

自治医科大学には義務年限という決まりがあり、卒業後9年間は自治体の職員として過疎地の診療所などに赴任する必要があった。その流れで配属されたのが、医療過疎地の病院や診療所だった。

特に紀和町立紀和診療所での経験は印象深かった。唯一の医師であったため、地域住民は頼めることは何でも小林院長に頼んでいた。内科はもちろんのこと、骨折やアキレス腱の断裂など簡単な外科手術もカバーしていたという。

「中には『飼猫を車で轢いてしまったので診てほしい』という相談もありました。患者さんからの要望は実に幅広く、多岐にわたっていました」

その後は2015年に鈴鹿中央総合病院呼吸器センターへ転籍するまで同大学に在籍していた。そして2022年、勇退する院長が運営していた既存のクリニックを継承し、こばやし内科・呼吸器内科クリニックを開業するに至った。

30年余、呼吸器の専門勤務医として勤めてきた後の転身だったため、周囲に驚かれた向きもあったというが、若かりし頃に世話になった地域に貢献し、自身の培った医療を還元していくことが「自分の使命であり、医師としての集大成でもある」と考えた。「還暦を目前にした時、地域医療に携わることが原点回帰だと思った」訳である。

小林 裕康  
KOBAYASHI HIROYASU

咳・息切れが  
少しでも

後悔して  
からは  
もう遅い!

慢性閉塞性肺疾患・  
間質性肺炎・肺がん……  
放置されがちな  
咳・息切れのリスクと対策を  
呼吸器のスペシャリストが  
徹底解説

定価990円(本体900円+税10%) 2024年12月

著書『咳・息切れが少しでも気になったら読む本』では呼吸器疾患について啓蒙している

「咳に悩んでいる患者さんが増えています」と小林院長。高齢者だけでなく、比較的若い世代の来院もあるという。

「地域性もあると思います。クリ

ニックのある亀山市には工場や物流関係の仕事に携わっている方も多いため、屋外の作業が多いのでしょう。『咳などの症状を診てほしい』と、当クリニックを利用してもらえるようになってきました」

開院から約2年が経過し、地域医療に加えて呼吸器疾患の専門医としての知名度も着実に高まっています。プライマリケアと専門性を兼ね備えた新たなクリニックとして患者の認知が進んでいる。

一方で、近隣のクリニックが3カ所ほど閉院し、亀山市の医師会のメンバーは減少傾向にある。その煽りを受け、行く場所が無くなり困った患者が同院を利用しているケースもあるように、地域医療において同院の重要性は高まり続けている。

### 呼吸器疾患を診断するための医療機器が充実 望まれる症状に適した選択肢を提案するよう心掛ける

同クリニックは地域医療をベースにするが、そこに「呼吸器疾患という専門性がある程度付け加えていきたい」と小林院長は考えている。地域のニーズに合わせてながら、「できるだけ専門性の高い医療を地域へ還元していきたい」という想いがあるためだ。

呼吸ガス分析装置や呼吸機能を測定するモストグラフなど、呼吸器疾患を診断するための医療機器は充実している。地域にありながら、総合病院に近い検査や診断が受けられる体制が整っている。

「当クリニックで対応できる病状なのか、あるいは専門病院へ行った方がいいのか、患者さんに対する診断の交通整理ができるだけの設備は揃えています」

日本では原因がほぼ100%喫煙の習慣によるものだという、閉塞性肺疾患（COPD）の患者にも対応。治療に加えて、禁煙できない患者には、粘り強く、タバコから遠ざかることができるよう支援を継続している。そのほか、ぜんそく外来や睡眠時無呼吸症候群の治療も守備範囲だ。加えて、新しい診断技術では、AIを使ったインフルエンザ検査機器を取り入れている。

「撮影した喉の写真を基に、AIが陽性かどうかを判断するシステムです。綿棒を使わない低侵襲の検査方法なので、お子さんなどには最適ではないでしょうか」

小林院長の診療姿勢を見ていると、治療方法を押し付けず、患者が望む、または症状に適した選択肢を提案している印象がある。地域に根差した「かかりつけ医」としてのクリニックが土台にある上で、呼吸器の専門医としての知見も活かす。双方のバランスをうまく取りながら、患者にベストな選択肢を模索するとも言おうか。信頼関係を重視している姿勢が見て取れる。

「医学の教科書では正解の治療法だとしても、患者さんによっては合わない方もいます。各人の家族観や年齢、性別など背景が異なる訳ですから、通り一遍の治療にはなりません。ですから、患者さんとは普段からできるだけ信頼を醸成しておくことが大切なのです」

## 治療の大きな要素を占める患者との信頼関係の構築 地元住民を対象にした勉強会を定期的開催

医師を続けていく原動力は、「患者さんとの交流を通して次第に信頼関係が構築されていくこと」だと語

る小林院長。患者と密な関係になる医療過疎地での経験が大きく影響しているのは想像に難くない。

勤務医時代も同様に、患者との信頼関係の大切さを再認識する経験が多かった。印象深いのは、大学病院時代に出会った肺移植を待つ30代女性患者とのエピソードだ。

骨髄移植をして白血病が完治した患者だったが、後に間質性肺炎を発症し肺移植が必要になった。

「骨髄移植後の免疫反応が原因だったと思います。移植が難しいことは分かっていたのですが、一縷の望みに託して臓器移植のネットワークに登録しました」

しかし、その患者は移植を待たずに亡くなってしまった。しかも、亡くなったその翌日に「移植ができる」という一報が届く、悔やまれる結果となった。

「これにはショックを受けました。後に鈴鹿中央総合病院では2人ほど肺移植へ繋げることができましたが、『あの患者さんの時も、もう少し積極的に動いていれば』と後悔が深まっていきました。亡くなった方がいる一方で、移植が上手く行き、酸素吸入もなしで生活できている方もいると思うと……やりきれなくなりましたね」

この苦い経験もあって、少しでも「呼吸器疾患のことを知ってもらおう」と考えた小林院長は地元住民を対象にした勉強会を定期的に開いている。

「肺を移植して命を繋ぐ人もいれば、『タバコを吸うと、咳が出て困る』と来院する人もいます。現実の理不尽さを感じざるを得ませんが、地域への啓蒙など、少しでも肺病を予防する大切さを伝えていければと思います」

## PROFILE

## 小林 裕康 (こばやし・ひろやす)

1987年、自治医科大学 卒業。  
 同年、県立総合塩浜病院 初期研修医として入職。  
 1989年、紀南病院内科 入職。  
 1991年、紀和町立紀和診療所 配属。  
 1994年、三重大学医学部付属病院第三内科 入職。  
 1999年、米国ニューヨーク・コーネル大学医学部研究員。  
 2003年、三重大学医学部付属病院呼吸器内科医員。  
 2007年、同助教。  
 2010年、同講師。  
 2015年、鈴鹿中央総合病院呼吸器センター内科 部長。  
 2022年、こばやし内科・呼吸器内科クリニック 開業。

## INFORMATION

## 医療法人好日会 こばやし内科・呼吸器内科クリニック



URL <https://kobayashi-lung.com/>

所在地	〒519-0163 三重県亀山市亀田町380-4 TEL 0595-83-2121
アクセス	亀山市立医療センターより東へ200m 亀山市「亀山バイパス」からすぐ クリニック西側に新しい駐車場完備
設立	2022年4月
診療内容	内科、呼吸器内科、ぜんそく外来、COPD 外来、間質性肺炎外来、各種健診・予防接種
診療時間	<月～水・金> 9:00～12:00、15:00～18:00 <土> 9:00～12:00 <休診日> 木・日・祝
基本方針	医療の谷間に火を灯す



小林院長は生涯の道と決めた地域医療への貢献をこれからも続けていく

「与えられた場所で努力し、全力を尽くす」  
 大切なのは地域住民が容易にアクセスできるクリニック  
 今後も同クリニックを医師としての集大成にするべく、地域医療を支えつつ、自身の専門分野である呼吸器治療も提供しながら、今まで培ったものを還元していくという小林院長の姿勢に変わりはない。  
 「地域の患者さんが容易にアクセスできるクリニックであり続けることが大切だと思います」  
 より利便性を高めるため、数年後を目途にクリニックのリニューアルも計画中だ。地域医療を取り巻く環境が厳しさを増す中、何とか診療拠点を維持しようと努力を続けている。  
 座右の銘は、「与えられた場所で努力し、全力を尽くす」。地域医療を尽くすべき生涯の道と信じ、患者との信頼関係を重視してきた小林院長の医師人生を象徴するような言葉である。  
 60歳を超えて、「あと何年、医師を続けられるか分かりません」と謙遜する小林院長だが、「自身の知見を地域に還元する」という強い意思は今後も変わることはないだろう。

大切なのは地域住民が容易にアクセスできるクリニック  
 「与えられた場所で努力し、全力を尽くす」